

いのち (下)

橋田壽賀子



NHKテレビ・シナリオ

NHKテレビ・シナリオ

いのち

(下)

橋田壽賀子

日本放送出版協会





橋田壽賀子（はしだ

大正14年京城で生まれる。日本女子大学国文学部を経て、早稲田大学文学部芸術科卒業。昭和25年松竹脚本部入社、35年退社。以後シナリオ・ライターとして、数々のテレビドラマの脚本を執筆、あわせて劇作家としても数多くの舞台台本を手がけている。その幅広い活躍で、53年度放送文化賞を、また、「おしん」で59年度菊池寛賞を受賞した。

代表作として、大河ドラマ「おんな太閤記」、銀河テレビ小説「となりの芝生」、朝の連続テレビ小説「おしん」がある。

NHKテレビ・シナリオ

いのち (下)

定価 一、四〇〇円

昭和六十一年十一月二十日 第一刷発行

著者 橋田壽賀子

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一（〒150）

電話 〇三—四六四—七三二一

振替 東京一—四九七〇一

編集協力 天野隆子／津島康一／ドラマ制作班

印刷 亨有堂／近代美術／千代田グラフィヤ

製本 石毛製本

検印廃止

© 1986 Sugako Hashida Printed in Japan

ISBN 4-14-005125-6 C0393 ¥1400F

（落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません）

い
の
ち

(下)

装 装
幀 画
蟹 田
江 代
征 素
治 魁

目次

35	さらば津輕よ……………	7
36	光さす道……………	28
37	女のしあわせ……………	50
38	女ふたり……………	72
39	花嫁衣裳……………	94
40	愛の賛歌……………	116
41	津輕のおんな……………	138
42	嫁のつとめ……………	161
43	望郷……………	183
44	あしたこそ……………	205

45	新しき家族……………	227
46	ガン告知……………	249
47	さらば友よ……………	271
48	帰りなんいざ……………	293
49	永遠 ^{とわ} のわかれ……………	314
50	いのち、ふたたび……………	335
	あとがき……………	365

放送記録（大河ドラマ 毎週日曜日、夜八時～八時四十五分）
下巻には、昭和六十一年八月三十一日放送の第三十五回より、十二月
十四日放送の第五十回までのシナリオを収載しました。

さらば津軽よ

N——昭和三十六年の秋から一年だけのつもりで東京の近郊に開業した末希は、津軽の診療所の借金を返済してなお余るほどの収入を得、東京へ出てきた目的は十分果たして、津軽へ帰る日を迎えていた。が、末希は、一年の間に地域に根をおろした医者としての責任を思うと、どうしても高原医院を閉める気にはなれず、なんとかして東京で仕事を続けることを、剛造やテルに理解してもらおうと、津軽へ発った。主婦の座を捨ててまで医者としての道を選ぼうとしている末希の無謀を案じて、ハルが末希に同行し、末希とハル二人の旅であった。

弘前・郷土料理屋・座敷（昼）

金太が、末希とハルを案内してくる。

ハル「（金太に）こんなところのんびりしちゃいられない

のッ。お土産やなんかで荷物が多いから、金ちゃんに送ってもらおうと思って、電話したただけなんだから」

金太「いいんでねですが、夜行ではたいへんだったでしょう。ま、ゆっくり昼飯でも食って……」

末希「悪いわねえ、金ちゃんだって忙しいのに……」

金太「今日の仕事の手配はすませでしまっただけ……。あどは現場見まわるだけで……。」（とハルに）今度青函トンネルっていうばかりでかい工事が始まるんだよ。その工事のためにまずひとや資材を運ぶ道路をつくるんだけども、それさ食いこめそうなんだ。いいところさ来てくれたよ。一度、道路工事の責任者に挨拶しておいでくれると助かるんだけどな」

ハル「そんなことしに弘前へ来たんじゃないの。それどころじゃないんだから」

金太「なにがあったのが？ 俺はまだ、末希お嬢さまが東京引き揚げて津軽さお帰りになるハデ、ハルさんもついでに遊びにきたんだとばかりかし……」

黙っている末希とハル。

金太「いいんだ、いいんだ。ハルさんはうちの会社の株主で社長みたくだもんだハデ。顔見だらついで頼る気持ちにもなるんだけどよ、俺に委^{まか}せられてる以上、俺の力でやらねば……。ああ、やってみせるハデ」

未希「金ちゃんもよくここまでになったわねえ。偉いわ」

金太「ハルさんのおかげだ。ハルさんに会わなくてあったら、今ごろどうなっていたか……」

ハル「ご時勢なんだよ。オリンピック、オリンピックって東京はもちろん、日本国じゅう建設ブームでさ、運よくそういうときにめぐり会えただけのことだよ」

金太「未希お嬢さまも東京の病院は繁盛なさったそうですねえ。やっぱり東京だ、津軽とは違うって邦之坊ちゃまが感心しておいででした。おやめになるのはもったいねど、思ったばて、佐智お嬢さまも清さんもイネさんも、未希お嬢さまのお帰りを、そりゃあ楽しみに待ってるんだハデ……」

未希「……」

ハル「（未希に）そうなのよ。剛造さんたちだけじゃない、高原のひとたちだって、未希さんが津軽で暮らすものだと思ってるの。みんなを裏切るようなことはやっぱり……」

未希「……」

ハル「はつきりいっとくわよ。無理押しするのはよしなさい。わかってもらえなかったら諦めるの。たとえ、反対されても未希さんは東京へ帰る覚悟でいるかもしれない。でも、そんなことになったら、私は二度と東京

の建物は貸さないわよ」

未希「ハルさん……？」

ハル「当たり前でしょ。剛造さんやお姑さんが賛成してくれないのに、勝手な真似してごらんさいよ。夫婦別れにだってなりかねないのよ。私は結婚もできなかった。家族もいない。でも、未希さんは剛造さんとめぐり会えた。それがどんなにしあわせなことか……ひとりぼっちの私にはよくわかるから、きびしいこともいうの」

いぶかしそうにきいている金太――。

そこへ店の女主人、容子（32）が、女中さんと一緒に料理を運んでくる。

容子「いらっしやいませ」

金太「（未希とハルに）この店の女将です。（と容子に）俺が便利屋やつてるからお世話になってる未希お嬢さま。このひとが俺の大恩人のハルさん」

容子「お初にお目にかかります。お噂はいつも社長から、耳にタゴがでざるはどうかがつております。（と笑い）社長には、ひとがだならぬお世話になっております。今後ともよろしくお願ひいたします。土地の田舎料理でお口に合うかどうか存じませんが、どうぞごゆっくり……」

と頭を下げて去ってゆく。

——ハル、見送り、探るように金太を見ると、

ハル「金ちゃんがやらせてるんだね、この店……？　なかなかのもんじゃない」

金太、ドキッとしたようにあわてるが、

金太「商売、商売ッ。けっこう当たってるんだ」

ハル「金ちゃんもとうとうそこまになつたのか。たいしたものだ（と笑う）」

金太「お……俺ッ、あの女とはなんも……」

ハル「（金太に）いい女むすめじゃないの。金ちゃんがいつまでもひとりでいるから心配してたんだよ。よかった、よかった」

金太「ほんとに、俺……」

ハル「あんたも男だろ、金出したからには、しっかり元とらなきゃあ……。（と笑い未希に）未希さん、そういうことなら、おいしいものたらふく食べてこようよ。津軽へ着いたら大仕事が待ってるんだ。精つけとかなきゃあね。（と料理を食べてみ）金ちゃん、安心したあ。こんなにおいしい料理毎日食べられるなんてしあわせだよ、あんた……」

くさっている金太。

ハル「終戦後二十年近くもたって、日本は考えられないほ

ど変わったけど、おんなじようにみんなも変わったよね。それがいいことか悪いことかはわからないけど、これからもどんどん変わっていくんだろうね」

金太「……」

ハル「あと二十年たったたらどんなになってるんだろうね、みんな……」

ふと感慨深そうにつぶやいているハル。

津軽・高原家・台所（午後）

ハルが金太と一緒にいる。

ハル「こんにちはッ」

居間にいた清吉、イネ、佐智、驚き、

清吉「ハルさんッ……?!」

佐智「いらっしやいッ。どうしたのッ……？　ひとりで来たのッ」

ハル「未希さんと一緒……」

佐智「お姉ちゃんもッ……?!」

イネ「未希お嬢さまは、どちらさッ……?!」

ハル「岩田さんへ……。だって未希さんは岩田の家のひとだもの」

清吉「そりゃそんだ。（と笑い）やっとお戻りくださいました。が。やれやれだ」

イネ「そいだばたいへんだッ、お祝いの支度さねば……。

(と清吉に) ハルさんも来てくれたんだ、今夜は岩田のひとだちにもうぢさ集まってもらって、みんなで、未希お嬢さまがお帰りになったお祝いしたらどんだべ」

清吉「ああ、俺が話してくるべ」

と立とうとする——その清吉を止めているハル。

いぶかしそうな清吉の顔。

ハル「(思わず) 清さん。私はね、ここの診療所には患者が来なくなつて、月々の借金の返済もむつかしくなつたつていうし、医者が医者の仕事できないで、畠で働いてるなんてどんなにづらいだろうと思つたから、それならせめて一年でも未希さんを東京へ呼んだの。そりゃあ私だつて正直な気持、未希さんが、東京はなれるのもつたいたいと思つてる。未希さんの味方したいのは、やまやまだわよ。でも、やっぱり……しかたないんだよね」

清吉「未希お嬢さまが、なにが……?」

ハル「私がいけなかつたんだ……よかれと思つてしたことが、寝た子起こすようなことになつちまつて……結局仇になつちまつた」

やりきれないようにつぶやくハルを、いぶかしそうに見る佐智、清吉、イネ。

岩田家・居間(午後)

未希が、テル、剛造、竜夫、典子に東京の土産を渡している。

典子「ああッ、オーバーだッ、あつたがそんだなあ。こしたの欲しくてあつたんだッ」

竜夫もオーバーを着てみながら、

竜夫「東京でこうしたのが流行つてるのがあ。いがしてるな、やっぱし……」

テル「私さまで、こした高い着物ッ……。大島だなんて一生着ることねど思つていだのに……。したばて、こしたむだ遣いして。ここさ戻ってきたら、もう東京の病院のようなわけにはいがねんだぞ。せつかく東京で苦労して稼いだ金だ、大事にさねばマイネのに」

未希「今までご迷惑かけたんです。せめてそれくらいのこと……」

テル「一年だなんて、あつてすまであつたよ。したばて、やっぱし家には母親つてすものがいねば……。ホツとしたよ、戻ってきてくれで……」

未希の顔がづらそうにかげろ——。

その未希をじつと見つめる剛造。

竜夫「俺はがっかりだな。母さんが東京の病院続けでくれ

だら、俺も東京さ出でいくつもりであつたのに……」

未希「……？」

竜夫「俺、ひとりで行くがな、中学卒業したら……」

テル「まだそした夢みてえなことッ……。お前はこの家の跡取りだ。集団就職だなんて、ここで仕事のねものが行くんだ。お前にはリンゴ手伝ってもらわねば、私だつてもう、そうは働げねえんだハデな」

竜夫「リンゴだなんて作つてどうなるんだッ。朝まから晩まで休む暇もなぐ働いだつて、天気悪がつたり、虫ついたりしたら、ろくだ収穫もね。豊作だら豊作で値が下がつて、なんのために苦勞したんだがわがらね。俺は東京で勉強して、月給とりになりてんだ。自然に振りまわされる農業だなんてたくさんだよ、もう……」

テル「なんだどッ。お天道さまのおかげで食わせでもらつてゐるのが、そした罰あたりだごとッ……」

竜夫「それがいやだつて、しゃべつてゐるんだッ」

剛造「竜夫ッ、いいかげんにしろッ」

テル「誰も彼も、東京、東京つて……東京にかぶれでまつてッ……」

暗い顔になる未希。

それへ、

テル「あんだ、まだ高原さ行つてねんだべ。早く顔見せて

あげる。清さんやイネさんが、どしたに待つていだが……」

剛造「邦之さまも佐智お嬢さまも、もうそろそろだつて首長くしておられる。うちのごとはいいいハデ……」

未希「（思いきつたように）その前に、ご相談したいことがあるんです」

やっぱりといった顔で未希を見つめる剛造。

が、テルはのんきに、

テル「そしたごとは、あどでゆつくり……。高原のみなさんに挨拶するほうがさぎだ」

未希「時間がないんです。一日でも早く、東京へ帰らないと、そうそう医院を閉めておくわけには……」

いぶかしそうに未希を見るテル。

高原家・居間（午後）

邦之、佐智、清吉、イネが集まって、ハルと話している。

邦之「せば、未希さんは、どうしても東京の医院続けるつていうんですか」

ハル「なんてつたつて、月に百万ぐらいの収入があるそうだから……。普通のサラリーマンの月給の五十倍だもんね」

イネ「へえ、そしたにッ……?!」

佐智「この夏、ここの診療所の借入金四百万円、全部返しなさいって、小切手送ってきてくれたわ。そのときはびっくりして、無理してるんじゃないかって、ずいぶん心配したけど、それじゃあ四百万だって返せるはずよねえ」

邦之「医者っていうのは、繁盛すれば儲かるものだってきいであるばて、ここであれば、とても信じらいねな」

清吉「したハデって、まだ東京さお戻りになるようなごと許される道理がねごす。テルさんや剛造がきいなら、ただですまねごとです。未希お嬢さまがお話しになる前にお止めさねば……。 (と立つと) ちょっと岩田さ行つてまいりますッ」

イネ「ああ、テルさや剛造の耳さ入らねうちにッ……」

清吉、あわてて出ていこうとする。

と、台所へテルがとびこんでくる——。

そのテルを止めるようについでくる剛造。

剛造「母^{かつ}ちゃッ、俺だちで話し合えはすむごとでねがッ。なんもこちらにまで心配かけることはッ……」

テル「(剛造を振りきりながら) んにヤッ、清さんやイネさんにもきいでもらうッ。未希さんと私の^{おち}しゃべるごとど、どっちが間違つてゐるが、きいでもらうんだッ」

びっくりして邦之、佐智、ハル、イネも立つてくる——。

清吉、剛造とテルに、

清吉「どうしたんだッ」

テル「(清吉に) どうもこうもッ……。未希さんが東京で医者続げだいつて……。そしたばがだごとが通るはずがねごすベッ」

入り口で未希が黙つて立つてゐる。

佐智「お姉ちゃん……?!」

戸惑つたように、佐智を見つめる未希。

同・座敷

未希が仏壇の前で合掌している——。

その未希を見つめてゐる佐智。

同・居間

未希が、テル、剛造、邦之、佐智、ハル、清吉たちと話している——茶をいれたりしてゐるイネ。

清吉「(未希に) たしかに未希お嬢さまがなさろうとしてゐることは、間違つておりす。そりゃあ、未希お嬢さまがおひとりだら、私だつてなんもいけません。しかし、未希お嬢さまは医者である前に、岩田家の嫁だん

です。それも未希お嬢さまが、ご自分でお選びになった道でいいへんが。いまさら、それをお捨てになるようなこと……」

未希「わかつてるの。それはよくわかつてる。だから、頭を下げて頼んでるのよ」

清吉「なんぼ頭をお下げになったって、許されることと許されねごとがあります」

テル「そんだよ。大体そしたごと頼むほうが、どうがしてるんだ。東京では随分儲がるそんだハデ、欲に目がくらんでしまったんだべ……」

未希「そうじゃありません。私はこの村が無医村だったから医者になったんです。でも、ここには、立派な病院もできて、私がいなくたって、村のひとたちは十分な医療を受けられます。でも、東京で私が開業しているところは、うちの病院がなかったら困る患者さんが、まだたくさんいるんです。昔、ここが無医村だったように、東京の中にも無医村があったんです。昔、ここで医者になりたかったのとおなじように、東京の無医村で働きたいだけなんです。お金が欲しいんじゃありません。私を頼って来てくれる患者さんを、ひとりでも多く診て治療してあげたいだけなんです。それは医者になったものの業^{わざ}みたいなものかもしれません。そ

れだけは信じてください」

邦之「そうした気持は、おなじ医者としてよくわかるな。

ことに未希さんは医者になった動機が動機だハデ、人一倍医者ってすものの使命感が強いのがもしらね」

テル「そいდანだば、家族をないがしろにするようなことをしても、いいってすんですがッ」

未希「生意気なことをいうようですが、人手を雇ってすむことなら、私の代わりに働いてくれるひとを頼んでください。機械で農作業が楽になるのなら、いくらでも買ってください。それくらいの費用は私が……」

清吉「未希お嬢さま……そしたごとで、すむど思っておいでだんですがッ。ひとや機械で、嫁の代わりがでぎるどお思いだんすかッ。よくもそした情けねごとッ……未希お嬢さまのお言葉とは思えませんッ。嫁や母親のつとめが果たせねんだら、岩田の家を出で、東京さおいでになるんだネシ。離別されだって当たり前のごをなさるんだハデ……」

イネ「(清吉に)とりなし役のあんだが、そしたぶちこわすようなごとッ……」

清吉「(未希に)なんぼお嬢さまでも、ひとの道にはずれるようなごとはお許しでぎません。いえ、お嬢さまの将来のためにも、家族をお捨てになるようなごとをな

さつては……。なんぼ患者につぐされだつて、しよせんは赤の他人です。患者がなにをしてくれませんか。やっぱし、夫婦や親子の絆きずなを大事になさいるほうが……」

テル「ああ、清さんのしゃべるとおりだ。それでも、東京さ行ぐつてすんだら、岩田どは縁を切つてがらにすんだな。嫁や母親の役目も果たせねような女だなんて、うちにはもう用はねんだハデ」

蒼あささめている未希の顔。

それへ、

ハル「未希さん、諦めるのよ。ここであつて医者ができないいわけじゃないでしょう」

邦之「（未希に）じつは、僕だち、お義姉ねえさんが帰つていらしたら、ことはお義姉さんにお委せして、弘前で開業するつもりでいるんです」

未希「……？」

邦之「この診療所は、お義姉さんひとりで十分です。存分に仕事なさってください」

佐智「（未希に）それならいいでしょう。この診療所だつて、今はまた、けっこう村のひとたちに頼りにされるようになったの。そりゃあ東京とは、くらべものにはならないだろうけど、医者役割はちゃんと果たせるわよ」

未希「あなたたち、そこまで……？」

イネ「（未希に）そんだんですよ。邦之さまも佐智お嬢さまも、未希お嬢さまが津軽で腰を落ちついで、高原医院ど岩田家の嫁ど、両方のお暮らしがうまぐいぐようにど……。私だちも寂しくなりますけど、未希お嬢さまのおしあわせのためだら、邦之さまだちが弘前さおいでになるのも、しかだがないと諦めているんです」

邦之「（未希に）お義姉さん、ここであつて、まだまだするごとはあるんですよ。町立病院ではできない、きめのこまかい医療をしていくのは、われわれの責任なんですがら……」

未希「……」

邦之「頑張ってください、お義姉さんッ」

テル「ありがでござです。みなさんに、いろいろお心づかいいただきまして……」

ハル「（未希に）未希さんが心配しなくつたつて、あの辺にもすぐ病院ができるわよ。抜け目のない連中が多い世の中だもん、儲かるとわかつたら、ほつとくわけないわよ」

未希「……」

ハル「未希さんはやっぱり津軽にいるのが、いちばんしあわせなの」